

だ。是れは再び束ねる手数を勘定したもので、いかに同家が繁昌したものか窺はれる。尤も同家の質屋部では、各村々々の受持担当者を置いてあったと云ふ。因みに同家の邸内に三十三観音を安置してあったが、其台は残らず千両箱であったとのことである。』とある。

注(3) 「仙台語彙」(三原良吉。「仙台郷土研究」第10巻第6号の内)に『藩の財政を助くる為め城下の富商などの献金に依り士分に取立てられたる者に対し巷間侮蔑して斯く云へり。献金の額の多少に随って番外士、大番士等の別あり。苗字帯刀を允〔ゆる〕され、店の外に土邸を構ふるを許さる。』とある。「仙台市史」第1巻に、『「金銀等上候百姓凡下」を侍に取立てる謂わゆる金上侍の制は、早くから「先例之格」としてあり、既にその弊を認めた吉村〔第5代〕によって禁止が計られたことがあったが、深刻化する財政難は却ってこの例を増加させるばかりであった。』「伊達家文書」之7の内〔2549〕「伊達吉村挨拶書案」の文中に『且又金銀等上候百姓凡下是又先例之格を以侍ニも申付来候得共如被申聞不都合之義と存候故に去夏下向之以後ケ様之類ハ向後申立間數品々も以書付出入司郡奉行へ申渡置候……〔享保6年〔1721〕黒沢要人あて〕』とある。

資料 仙台藩治概要

仙台昔語電狸翁夜話(伊藤清次郎)

宮城県通史(清水東四郎)

## 15. 「瓢木」は何と読むのか

問 「桂重次先生」という追悼録の編集発行が「瓢木会」となっていますが、この会名の「瓢木」は何と読むのですか。<sup>(1)</sup>

答 瓢木会とは、東北大学医学部第二外科教室の同門会で、同教室のもとの建物の入口の左、産婦人科教室との間の所に「ひよんのき」があったので、この木の名をとって会名とし、<sup>(2)</sup>「ひよんのき」に「瓢木」の漢字を当てたものです。<sup>(3)</sup>「杜の都名木・古木」(仙台市建設局緑地部)に次の記事があります。『「東北大学医学部のいすのき」<sup>(4)</sup> 樹種イスノキ(マンサク科)・樹高7.5m・幹囲1.2m・推定樹齡220年 所在地星陵町1-1 所有者東北大学医学部 本州西南部、四国、九州が自生地、仙台で自然生を見ることはない。藩政時代の武家屋敷だったところに移植されたものである。初夏のころ葉にアブラムシが寄生し虫糞<sup>(5)</sup>を生じ、これを吹くと「ひょうひょう」と鳴るので、ヒョソノキの別名がある。医学部の第二外科の同窓会はこれにちなんで「瓢木会」の名をつけて、

この木をシンボルとしている。』

注(1) 明治32年12月6日新潟県新発田町に生れる。大正13年4月東北帝国大学助手、昭和4年2月講師、同8年11月3月欧米留学〔2年〕、同13年7月金沢医科大学教授、同16年3月東北帝国大学教授、同30年6月東北大学医学部附属長町分院長併任（4年）、同38年3月停年退職、東北大学名誉教授、同年4月岩手県医療局顧問、同40年7月岩手県立中央病院長、同44年1月岩手県成人病センター所長、翌45年4月岩手県立衛生学院長、同年7月6日歿。特に、脳外科・食道外科・脾臓外科の権威であった。

注(2) 医学部・病院の改築総合計画が進行し、昭和50年代の初めには新設棟に移り、この建物は取壊し撤去された。

注(3) 「牧野新日本植物図鑑」に次の記載がある。『いすのき、ひよんのき・ゆしのき〕〔まんさく科〕*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. 本州（西南部）、西国、九州の山中に自生する常緑高木で、大きなものは高さ20m、幹の直径1m内外に達する。葉は互生し長楕円形、先端は鈍形、基部はくさび形、長さ5～8cm、幅2～4cm、全縁、両面とも無毛で光沢はない、主脈はやや著しいが羽状の支脈ははっきりしない、ときおり大きな虫えいを作り、子供がその穴を吹いて笛にする、春開花し、花は紅色で総状花序となって腋生し、上方には両性花、下方には雄花を着ける、花には花弁がなく、がく片は3～6個皮針形緑色で大きさは不同、外面には褐色の星状毛がある、雄しべは5～8本、太い花糸をそなえている。雌しべは雄花では退化し、両生花には1本ある、子房は2室で外室には星状毛があり、花柱は2分する、さく果は木質、卵形、外面には密に毛がある、長さ8mm位で二つに裂けて種子を出す、〔日本名〕語源が不明で、これまでに正しい解釈がない。この木の材をくしに作ることからくしの木の名がある、これはユキノキと発音が似ている、ヒヨノ木はその虫えいを吹く時、ひょうひょうと鳴る音に基づく名である、〔漢名〕蚊母樹は不適當な名である。』

このひよんの木は、戦災前には瑞鳳殿にもあった。これについて「伊達家史叢談」（伊達邦宗。大正11年）に次の記事がある。『文禄征韓ノ後、貞山公が朝鮮ヨリ齋〔もたら〕シ帰ラレタリト口碑ニ伝フル植物ハ臥竜梅ノ外ニ三種アリ、曰唐松、曰軍使木、曰梨樹トス、……軍使木ハ、仙台瑞鳳殿（貞山公廟）ニ在リ、軍使木ハ朝鮮名ニアラズ、仙台ニテ付セシモノナル可シ、和名ヲ「イス」一名「ヒヨノキ」ト称シ漢名ヲ蚊母樹ト称ス。我国植物学ノ権威東京帝国大学理科大学教授松村（任三）理学博士ノ言ニ曰ク、三百年前祖宗朝鮮齋帰〔せいぎ〕ノ樹、今尚存スルハ、実ニ珍重スルニ値スト。大正十年四月中旬、齋藤（実）朝鮮総督上京ニ先タチ、在京城ノ鮎貝房之進<sup>旧仙台藩門閥</sup> 総督ヲ介シテ、文禄征韓ノ役貞山公朝鮮ヨリ齋ラン帰ラレタル軍使木ニツキ、其ノ調査セル記事ヲ邦宗ニ送致セリ、其ノ全文左ノ如シ。

軍使木 漢名蚊母樹。和名イスノキ又ヒョンノキ。金縷梅科(即マンサク科) 暖地ニ自生スル常緑樹ニシテ高サ二丈ニ達スルモノアリ葉ハ長楕円形全辺ニシテ互生セリ往々小虫ノ為メニ囊状ノ膨大部ヲ生ジ後虫飛ビ出テテ空殻トナル是レ蚊母樹ノ名ヲ得タル所以ナリ四五月頃新葉ヲ生シテ後枝梢ニ花ヲ簇生ス色ハ深紅色ニシテ花冠ヲ有セズ綠色ノ萼紅色ノ雄蕊及有毛ノ雌蕊ヲ具フ(植物図鑑) 朝鮮ニテハ南方ノ暖地ニノミ自生シ濟州島(全羅南道)珍島(同)巨濟島(慶尚南道)ノ島々ニノミ自生セリト云フ木質甚タ堅緻〔けんち〕ナルガ故ニ梳〔くし〕ノ原料トシ又磨滅シ難キヨリ數居ノ溝ニ張り付ケ用キ又鉱物質多キ木ナルヨリ其灰ヲ陶器ノ上釉〔うわぐすり〕ニ用キルト云フ即チイスハイ是レナリ藩祖公ノ持チ帰ラレシハ當時行軍ノ道筋即チ慶尚南道ニテ発見サレタルモノナルベク特ニ甚タ有用ノ木タルカ故ニ當時既ニ研究サレ単ニ鑑賞用トシテニアラズ産業上有用ノ木トシテ移植サレタルモノト拝察ス内地ニモ九州ニハ自生セリト云ヘバ東北ノ寒地ニハ適セザリシモノタルベシ 此ノ木朝鮮名ハ未タ明カナラズ故ニ軍使木ハ発見サレシコロノ土語ナルカ或ハ當時之ヲ得ラレタル特別ノ事情ヨリ新ニ命名サレシモノナリカ明カナラズ植物図鑑葉形ヲ長楕円トセリ実物ハ卵形ナルモ是ハ木ノ年数ニ因ルモノニテ古木トナルホト葉ハ円形ニ変スルモノナリト専門家ノ実話ナリ』

注(4) 「都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律」(昭和37年法律第143号)と「杜の都の環境をつくる条例」(昭和48年仙台市条例第2号)に基いて調査を実施し、保存樹木として選出された146本(52種)について記録したものである。

注(5) この木については、次のような調査記録がある。

「宮城県名勝天然記念物調査記録」第12 (昭和13)のうち「天然記念物(植物)調査報告」(京道信次郎・加藤鉄治郎)に『珍木「ひよんのき」所在地仙台市北四番丁東北帝大病院構内 樹種ひよんのき・いす・いすのき・ゆすのき・石頭裸子(金縷梅科いす属) 学名 *Distylium racemokum* Sieb. et Zucc

「ひよんのき」は暖地に自生し本州中南部、四国、九州、琉球、台湾より支那南部に分布す。東北帝大病院構内に生育する「ひよんのき」は栽植によるものなれども南方暖地性の植物が当地の露地に旺盛に繁茂するは珍しきものなり。

大さ 地際の幹囲1.5米、地上1.5米の幹囲1.2米、樹高5.5米

形 幹は地上約二米にて三大枝に分れ各枝は又数多の枝葉を生じて旺盛に繁茂せり、葉は、常緑にして互生し有柄にして革質無毛滑沢なり、葉形は倒卵形又は楕円形を呈し全縁なり三厘乃至八厘に達す。花は穂状花序をなして四月頃開く、雌雄同株なり、果実は蒴にして果皮木質細毛密生し、柱頭の残存せる一本の針状突起を有し、十月頃成熟す、此樹は葉及嫩枝に五倍子(ごばいし)の虫瘤を生ずることあり、其形瓢に似たるに因り「ひよんのき」の名を得たりと、但し病院内の樹には未だ見られず。「ひよんのき」は大学病院構内関口外

科〔第二外科。関口→桂→葛西外科〕と産婦人科病室との中間の東端にあり、此敷地は元土族屋敷なりしとの事なれば、何人かは不明なるも其栽植にかゝるもの今日に及べるなるべし。』

「宮城県史」第15巻の内「巨木名木」（萱場柔寿郎）に、『珍木ヒョソノキ  
所在地、仙台市北四番丁東北大学附属病院。樹種、イスノキ、ヒョソノキ、イス、ユスノキ。科名、<sup>マンサク</sup>満作科。地際幹囲、1.5米。地上1.5米幹囲、1.2米。樹高、5.5米推定樹齡200年。現状、幹は地上2米で三大枝に分れよく茂っている。葉には大きな虫癭を生じ、その穴を吹けばヒョウヒョウと鳴るところから名付けられたものといわれている。』「仙台の文化財」（仙台市教育委員会）に『東北大学のイスノキ。星陸町東北大学附属病院構内。樹種、イスノキ、一名ユスノキ、ヒョソノキ。学名、*Distylium racemosum* Siebold et Zuccarini。イスノキは本州の西南部、四国、九州等の暖地の山中に自生する。東北大学のものは附属病院第二外科研究室〔昭和45年現在〕の南にあり、幹囲は地際で2m、地上1.5mで1.2m、地上2.35mの所で三大枝に分れている。高さ約7.5m、枝張りは東西約9m、東北6m余、樹勢はなはだ盛んである。この地はもと土族屋敷で、恐らくその頃珍木として植えられたものが今迄残ったのであろう。イスノキの表日本での栽植可能の北限地帯と思われる仙台にこのような古木のあるのは珍しい。イスノキは葉や若枝に虫癭が出来、その孔を吹くとひょうひょうと鳴る。ヒョソノキの俗称はこれに基づいたといわれる。又虫癭の形が瓢（ひさご）に似ているからとの説もある。（木村有香）』  
また、仙台市が昭和53年に、市制88周年記念事業の一つとして行った名木古木八十八選の中にも、このひよんのきが入っている。「仙台あのあるところ八十八年」（仙台市八十八選選定委員会編）に次のように記している。『大学病院のひよんのき。樹種、イスノキ（マンサク科）。推定樹齡、<sup>X</sup>三百二十年。樹高、七・五メートル。幹囲、一・二メートル。所在地、星陸町1-1（市営バス大学病院前下車徒歩十分）。所有者、東北大学。この木は暖地性で仙台が北限である。葉に虫癭ができ、その穴を吹くと「ヒョウヒョウ」と鳴るところから、この俗称で呼ばれる。』とある。

資料 杜の都名木・古木（仙台市建設局緑地部）

## 16. 土井晩翠の姓は「どい」か「つちい」か

問 土井晩翠のことを「どいばんすい」と読んだら、「つちいばんすい」が本当だと注意されました。「どい」と「つちい」とどちらが正しいのでしょうか。